

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

**〔最優秀賞受賞研究／論文部門（学部生）〕 援助
はえこひいき？ 孤児支援の構造分析**

著者	細井 咲希
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	15
ページ	130-160
発行年	2014-04
URL	http://hdl.handle.net/10114/9353

論文部門（学部生）

援助はえこひいき？ —孤児支援の構造分析—

国際文化学部 4 年 松本悟ゼミ
細井 咲希

もくじ

第 1 章	なぜえこひいきされるのか
第 1 節	問題の設定
第 2 節	問いと仮説
第 3 節	調査方法とその理由
第 4 節	論文の構成
第 2 章	既存研究レビューー 2 つの視点から
第 1 節	カンボジアで孤児が生まれる要因
第 2 節	カンボジアの孤児の現状
第 3 節	えこひいきの誘因
第 4 節	既存研究レビューーからみる本研究の意義
第 3 章	カンボジアの孤児支援の事例検証
第 1 節	仮説の再確認
第 2 節	なぜ孤児支援は孤児院支援に集中するのかドナーの事情
第 3 節	なぜ孤児支援は孤児院支援に集中するのか都市部と農村部の比較
第 4 節	分析結果
第 4 章	結論
第 1 節	結論
第 2 節	考察
第 3 節	展望
参考文献・資料	

第1章 なぜえこひいきされるのか

第1節 問題の設定

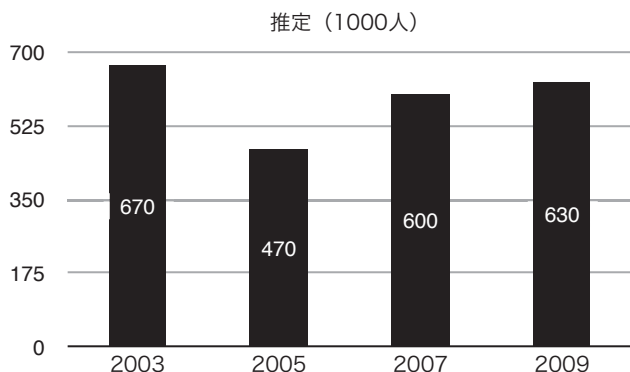
筆者が援助のえこひいきについて考えるに至ったのは、大学1年次に旅行会社が主催するスタディツアーでカンボジアの孤児院を訪れたことにある。そのときに筆者は初めて孤児と触れ合い、内戦が終結して20年以上経つカンボジアにも、未だに多くの孤児がいることを再認識した。

図1-1を見ても分かるように、カンボジアの孤児は2003年から2005年にかけて3割近く減少したものの、その後は再び増加している。その数は2009年には63万人にも及び、2005年から比較すると16万人も増えている。UNICEFの人口統計指標によると、2011年のカンボジアの18歳未満の人口は548万人であるから、18歳未満の子どもの総人口に占める孤児の割合は約11.5%、つまりカンボジアに住む約9人に1人が孤児であるという計算になる。これは推定数であるため、多少の誤差はあるかもしれないが、カンボジアでは今もなお、何らかの原因で孤児になっている子どもたちが少なくないことが分かるだろう。

もちろん、この状況を解決するために国際機構のUNICEFをはじめとして、多数のNGO団体やチャリティー団体などが活動している。その内容は、団体ごとに違いはあるものの、孤児たちが自立することを目的とした支援が多い。ホームページでそれらの活動内容をみると、孤児院支援を行なっている団体が多い印象を受けた。具体的には孤児院設立をはじめとして、文房具や衣服などの提供、学費支援、里親事業など、あらゆる面で孤児院をサポートしている。

そこで、国際協力NGOセンター¹ (Japan NGO Center for International Cooperation、以下、JANIC) のNGOダイレクトリー²でカンボジアにおいて孤児支援を行なっているNGO団体を調べたところ、10団体

図 1－1 何らかの理由により、親の一方もしくは両親を失った子ども²の推定数（0－17 歳）

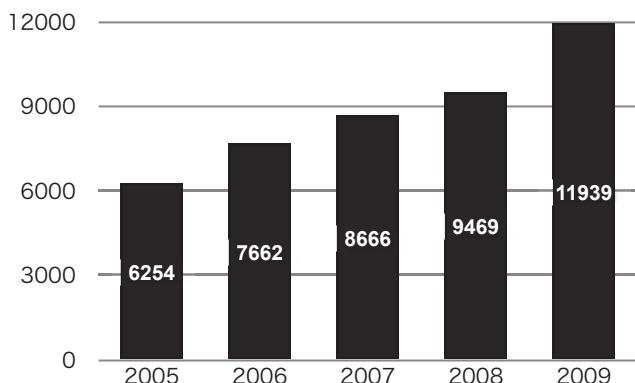


出典）世界子供白書 2005、世界子供白書 2007、世界子供白書 2009、世界子供白書 2011 より筆者作成

が該当した³。それぞれの団体の概要や活動内容を NGO ダイレクトリーや団体ホームページで調べたところ、実際にカンボジアで孤児支援の活動を行っていると確認できたものは5団体であった。そしてその5団体すべてが孤児院を対象とする以外の孤児支援は行っていなかった。つまり、NGO 団体の活動を見る限りは、孤児支援は孤児院支援とほぼ同義であった。

このように、カンボジアの孤児を実際に支援している日本の NGO 5 団体はすべて孤児院を支援していた。UNICEF の報告によると、2010 年の時点でカンボジア国内には 269 の孤児院があり、2005 年からの 5 年間で孤児院数は約 75% 増加している⁴。この数を見ると孤児院が急増していることは明らかであり、孤児院支援が多いことも頷ける。孤児院にすることで、衣食住に困らないだけでなく、人身売買などの被害にあう可能性も減る。さらに、職業訓練サポートや教育を受けられる機会なども提供されることで、孤児院にいる孤児たちは自立

図 1－2 カンボジアの孤児院で生活している子どもの数（人）



出典) A Study of Attitudes Towards Residential Care in Cambodia 2011 をもとに筆者作成

できるチャンスが与えられている。

確かに、孤児院支援をしたいと考えたとき、孤児院に支援をすれば目的を果たすことはできる。先程も述べたように、孤児院の数も急激に増えているため、孤児院支援も増えている可能性がある。しかし、いくら孤児院での支援を充実させたとしても、図 1－2 からも分かるように、孤児院にいる孤児は約 12,000 人でカンボジアの孤児全体の約 1.9%⁵にしかすぎず、孤児院だけを支援していたのではカンボジアにいる 63 万人もの孤児を支援したことにはならない。仮に、孤児院数や孤児院で生活している子どもの数が本論文で示した統計よりかなり多く、2 倍以上だったとしても、孤児院にいる子どもたちはカンボジアの孤児全体のほんのわずかであることに変わりはない。

筆者が訪れた孤児院⁵では、院長の話によれば、衣食住が確保されているばかりでなく、ダンスや英語まで教えていた。また、ダンス用のラジカセや遊び道具の折り紙、サッカーボールなど、生活環境は予想以上に充実していた。孤児院を訪問する前に筆者の頭の中にあった孤児は「孤児院にいる孤児」のみであった。だから、数多くの団体が

孤児院支援をしていることにも納得をしていたし、誰でも容易に孤児院を訪れ、寄付ができるツアーも肯定的に捉えていた。

しかし、実際に訪問し、孤児院で笑顔で暮らす孤児たちを見ると、どうしても「孤児院にいない孤児」を意識せずにはいられなくなった。本当に孤児支援というのであれば、孤児院に入っていない子どもたちを含めて平等に支援をする必要があるのではないか。この疑問こそ、筆者が本論文で援助のえこひいきについて考える理由である。

第2節 問いと仮説

カンボジアには60万人を超える孤児がいる。それにもかかわらず、なぜ孤児支援は孤児院支援に集中してしまうのか。これが本研究を通じて明らかにしたい問いである。この問いに対する仮説は次の通りである。

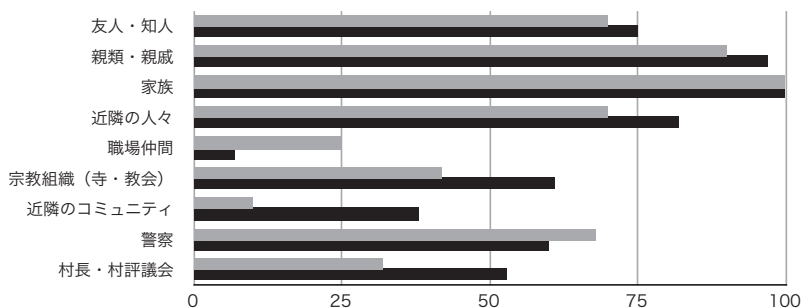
第1に、孤児院は多数の孤児が1ヶ所で生活しているため、支援の継続性や効率性を考えたとき、援助する側（ドナー）にとって支援がしやすいと考えられる。孤児院に支援が集中するのは、そのようなドナーの事情が優先されているからではないか。確かに、60万人を超える孤児全体を、資金面をはじめ全面的にサポートするというのは容易ではない。したがって、ドナー側は対象先を絞って活動を行う、つまり孤児院に支援を行うことで「孤児支援」という目的を達成しようとすることは理解できる。例えば、開発途上国でプロジェクトが行われる際、プロジェクトのほとんどは、支援を行う国の「大都市から伸びる幹線道路沿いの、『適度』に貧しい農村が選ばれ」る（田中・檜田・マエキタ 2006, p28）。これは、都市部に自宅や事務所を構えるドナーや、ドナーの支援者などが視察をする際に現地に行きやすいことが考慮されているためだと指摘されている。これをカンボジアの孤児支援に当てはめてみると、もし孤児院がない場合、支援をするたびに多く

の孤児たちを自力で集めたり、家庭を1軒ずつまわるなどの方法が考えられる。それに対して、支援対象である孤児が常に特定の場所に、しかも多数生活している孤児院は、その手間がかからないため非常に好都合の場所であると考えられる。また、孤児院が頻繁に移転することも考えにくいいため、継続的に援助を行うこともできるであろう。このようにドナー側の都合が優先されているために、援助対象をカンボジアの孤児としていても、実際は孤児全体ではなく孤児院という一定の場所に偏ってしまうのではないだろうか。

第2に、大多数の孤児は農村部にいて、地域社会や親戚が面倒をみてくれるのに対して、都市部の孤児は人のつながりが希薄で、行政以外の助けが得にくい。そのため都市部は孤児の比率に対して孤児院が多く、そうした都市部の孤児院への支援が集中しているのではないだろうか。稲田十一のアンケート調査によれば、「生活上のリスクおよび災害のリスクの際に頼る相手として、カンボジアの場合は圧倒的に家族・親族の比率が高」とされている（稲田 2013, p140）。図1-3では、それをカンボジアの都市部と農村部で比較した。この図で示したように、親類・親戚や家族への依存度や信頼度は、都市部と農村部のどちらも高いことが分かる。しかし、大きく異なる点として、農村部では近隣の人々や地域社会、村長・村評議会などへの依存度が高いのに対し、都市部の場合はそれらへの依存度や信頼度は低いことが分かる。これをカンボジアの孤児に当てはめて考えると、もし家族が亡くなって孤児になってしまった場合、農村部では自分の住んでいる地域の人々に頼り、一方で都市部では地域の人とのつながりが薄いいため、孤児院に頼るのではないかと考えられる。そして都市部の孤児が孤児院に入ったとき、そのような孤児院への支援が集中するのではないだろうか。この稲田の調査では、孤児院は対象として検討されていないが、孤児になった場合、都市部では行政への依存度が高いため孤

児院に頼るのではないかと考えられる。

図 1－3 都市部と農村部の比較



出典) 社会関係資本研究論集 第4号 (2013年3月) 図4をもとに筆者作成

第3節 調査方法とその理由

前節で述べた仮説を検証するためには、既存の文献を調査するだけでなく、孤児支援をしているドナーの意図や具体的な活動内容を研究する必要があると考えた。なぜなら、孤児支援が孤児院支援に集中するのはドナーの事情が優先されているからではないかという仮説を立てたからである。したがって本研究では、実際に孤児支援を行なっている NGO 団体に聞き取り調査を行った。

カンボジアの孤児支援を事例研究にしているため、聞き取り調査を行う NGO 団体はカンボジアの孤児支援を行っている団体に絞った。カンボジアは孤児が沢山いる一方で、孤児院支援が多く行われているからである。

以上のことを踏まえた上で、インタビューを行う NGO 団体は既述した JANIC の NGO ダイレクトリーで抽出する。そして、条件に合致した5団体に聞き取り調査を行うこととした。しかし、実際にメールで調査依頼をしたところ、5団体中2団体は返信がなかった。返信

があった3団体のうち1団体は、孤児支援は専門外という理由で調査協力を得ることができなかった。他の2団体については、調査協力を了承してもらえた。ただし、そのうちの1団体についてはインタビュー対象者がカンボジア駐在であった。筆者は今回は時間の都合上現地へ行くことはできなかったため、この団体とはすべてメールでのやりとりで聞き取り調査を行った。あとの1団体には半構造化インタビューを実施した。

筆者は当初、NGOダイレクトリーで該当した団体のみを調査対象とする予定であったが、なかなか返信が来なかったことから、聞き取り調査の対象範囲を広げることとした。新たな対象先の抽出は、google 検索で行った。その結果、条件に該当した数多くの団体の中から4団体に絞り⁶、新たに調査依頼のメールを送った。その結果、3団体に調査協力を了承してもらえ、インタビューを実施した。ただ、その中の1団体はインタビュー対象者がカンボジア駐在をしており、時間の都合上訪問することはできなかったために、この団体については、質問票を送り、メールで回答してもらった。また、すべての団体に対して、疑問点があれば再度メールを送り回答してもらうという方法をとった。

最終的にインタビューを行った団体は、NGOダイレクトリーで抽出した2団体、そして google 検索で抽出した3団体の計5団体である。また、NGOダイレクトリー、google 検索で抽出した中のそれぞれ1団体は、インタビューではなくメールでの回答である。

第4節 論文の構成

本章の問題設定を踏まえて、次章からは以下のように議論を進めていく。まず、第2章ではカンボジアにおける孤児の発生原因や孤児の現状、そして援助のえこひいきについて既存研究をレビューする。ま

た、レビューを通して、本研究の意義を示す。第3章では、なぜ孤児支援が孤児院に集中しているのかという本研究の問いに対する2つの仮説を、カンボジアで活動する日本のNGOに行ったインタビューをもとに検証していく。援助がえこひいきであることは多くの文献で指摘されているにもかかわらず、なぜ未だに孤児支援といういわば孤児の少数者への偏った支援が行われているのだろうか。最終章ではそれまでの調査を踏まえ、カンボジアの孤児支援の構造分析をして見えた援助のえこひいきについて結論と考察を述べる。

第2章 既存研究レビュー ―2つの視点から

第1節 カンボジアで孤児が生まれる要因

そもそもカンボジアでの孤児の発生原因は何なのであろうか。これまでのカンボジアの孤児はいわゆる内戦孤児が多かった。カンボジアは1884年にフランスの植民地となり、1953年には独立を果たしたが、その後も国内で混乱や内戦、武力紛争が続いた（UNICEF 資料）⁷。

内戦孤児が生まれた原因は大きく2つ考えられる。第1に、子供が親から引き離されたことである。

1975年4月、ポル・ポト率いるクメール・ルージュ軍⁸は、首都プノンペンに入城した。ポル・ポトは、民主カンプチアという新国家を誕生させ、文明社会を腐敗とする考えのもと、集団による農業を中心とした極端な共産主義社会を急進的に建設しようとした。これにより、それまでのカンボジア社会は破壊され、原始共産制ともいえるべき政策が矢継ぎ早に実施された（池上 2008）。子どもや妊婦、病人、老人も例外ではなく、避難民も含めて200万人もの市民がプノンペンを強制退去させられた（上田・岡田 2012）。この政策の方針により、学校や病院などは廃止され、国民は共同農場に所属させられた。また、家族というまともなものは解体され、共同農場の食堂で一緒に食事を取る

ことが義務付けられた。さらに、子どもたちは5、6歳で親から引き離され、「国家の子ども」として教育を受けるなどしていた。また、家族と引き離されたことに抗議したりすると、それだけで反革命として処刑された（池上 2008）。

第2に、無理な農業政策である。ポル・ポトの目指した経済的に自立した国家建設には、余剰米による外貨獲得が不可欠であった。しかし原始共産制の思想のもと、物事を知り、自分の頭で考える知識人⁹は支配の邪魔になるとして抹殺されたため、高度な技術などはもちろんなく、この非現実的な計画は人々と大地を無為に疲労させることとなり、カンボジアには大規模な飢餓が広がった（上田・岡田 2012）。

このように子どもが親から引き離されたり、知識人の抹殺や無理な農業政策のせいで過労や飢餓によって多くの人が亡くなった。これにより孤児が発生したというのがこれまでカンボジアで多かった内戦孤児の原因である。

では、内戦終結から20年以上が過ぎた現在、カンボジアで孤児が生まれる原因は何であろうか。その原因は、病気やけが、事故、貧困、暴力など様々である（UNICEF 2008）。特にHIV/AIDSは深刻で、カンボジアはアジア太平洋諸国の中で、成人のHIV/AIDS感染率が最も高いとされている。2003年時点で、カンボジアでは推定12万3,100人の成人¹⁰がHIV/AIDS感染者であるとされている。2003年だけでも、約8,000人の成人が新しくHIVに感染し、HIV/AIDS感染者の17,900人が死亡したと推測されている。例えば、首都のプノンペン周辺には約65の被服縫製工場があり、そこでの職を求めて農村部から30歳以下の女性が多く出稼ぎに来る。そこで働く傍ら、性産業に従事する女性もいる。彼女らのような農村部から都会へ出稼ぎ労働者が、都会でHIV/AIDSに感染し故郷に戻っていくことで、農村部や過疎地帯にまでHIV/AIDSが蔓延しつつある¹¹。HIV/AIDSの蔓延は、

カンボジア中の青年層を脅かす最も大きな問題となっているのだ。親が HIV/AIDS に感染し、亡くなってしまうことが孤児が生まれる大きな要因である。

また、地雷によって親が亡くなってしまうことも孤児の発生原因の 1 つである。国内には今も大量の未処理の地雷が残っており、その数は約 1,000 万個とされている。カンボジア国内の地雷による障がい者の数は 4 万人と推定されており、これはカンボジアの約 230 人に 1 人が地雷によって手足を失ったことを意味する。この比率はカンボジアが世界で最も高く、毎月 300 人が地雷によって新たに障害を負っている（UNICEF 資料）¹²。

このように内戦が終結したといっても、様々な原因からカンボジアの孤児は増え続けている。

第2節 カンボジアの孤児院に入っていない孤児の現状

カンボジアの孤児に関する既存研究のもう 1 つの焦点は、孤児院に入っていないカンボジアの孤児の生活環境についてである。

カンボジア保健国勢調査（CDHS：Cambodian Demographic and Health Survey）によれば、2005 年の時点で、孤児の 5 人に 1 人は世帯主が祖父母であることが分かっている。つまり孤児の祖父母が面倒をみているということである。しかし、祖父母は孤児となった孫たちのために十分な収入を稼ぐことは難しい。また、もし家族や親戚などに世話をしてくれる人がいなかった場合、子どもが世帯主になることを余儀なくされる場合もある。CDHS の 2000 年と 2005 年のデータでは、0.02% とごく僅かではあるが、「子ども世帯主」がいることも明らかとなっている。

しかし、兄弟がいた場合、兄弟そろって祖父母に世話になれるとは限らない。CDHS によれば、2005 年時点でカンボジアの 18 歳未満の

孤児の17%が兄弟と一緒に生活をしていないことが明らかとなっている。つまり、孤児になったとき、兄弟がいる子どもたちは別々の家庭で暮らすことも多いのである。この理由として、孤児の世話をする大人の負担を少なくするというものが挙げられる。確かに孤児1人の面倒をみるのも大変だと容易に想像できるのに、兄弟全員を引き取るとなれば1世帯当たりの負担はかなり大きくなると考えられる。しかし、兄弟が離れて暮らすというのは孤児たちにとっては親を亡くしたトラウマに加え、さらなるストレス源となり得る。

ここまでの既存研究レビューを通して、現在の孤児の発生原因は多様化しており、以前とは異なることが明らかとなった。また、孤児院に入っていない孤児の生活環境などについては調査が行われており、厳しい状況で生活しているということが浮き彫りとなった¹³。しかし、筆者の知る限り、孤児たちに対する支援、孤児支援のあり方について考察しているものはなかった。これまでのカンボジアの孤児研究は、孤児の状況のみに着目し、それに対して行われている孤児支援のあり方についての分析が欠けていると考える。

第3節 えこひいきの誘因

前節まではカンボジアの孤児について既存研究レビューを行なった。本節では援助をする際のえこひいきの側面について同様の文献レビューを行う。

「いかなるドナーもすべての途上国に均等に援助を行っているわけではない。それぞれのドナーには、それぞれの援助を行う理由づけの仕方があり、これに応じてどの途上国にどの程度の規模の援助を行うかが決定される」(佐藤 1998, p308)。このように、既存研究において、援助が行われる際にドナーの都合でえこひいきがなされることは論じられている。

援助対象が誰であるかは、そのほとんどの場合が援助をする側の論理¹⁴によって決められる。その際に問題となるのが、ドナーの考える論理と受け手の考える論理は異なっていることが多いということである。つまり、ドナーにとって公正だと考えられていることでも、支援を受ける側にとっては公正でないということがありうるのである。そしてこの認識の違いによって、ドナーの行っている援助が受け手の目には「えこひいき」だと映ることがある。ここで、1つの例を挙げたい。

日本の国際協力 NGO であるシャプラニール¹⁵は、バングラデシュのある村において、女性のための識字教室を開催し、村の女性を集めてバスケットを製作し、所得向上を目指すプロジェクトを実践していた。そして、このプロジェクトが順調に進んでいたある日、10人ほどの集団に宿舎を襲われ、2人の日本人スタッフが重症を負うという事件が起きた。その背景には、この活動が女性ばかりに肩入れしていることを、支援を受けていない村人たちが快く思っていなかったということにあった。バングラデシュ社会においては女性が虐げられ、所得を向上させる手段がない。だから女性に優先的に支援をすることに正当性があるというのがこのプロジェクトにおけるシャプラニールの論理であると考えられる。しかし、受け手側からしてみれば、このプロジェクトは貧困女性ばかりを支援対象とし、男性たちや他の女性たちにとっては支援による利益が受けられないために公平ではないと感じるであろう。

このように、ドナーと受け手の論理が一致していないと、受け手にとっては援助がえこひいきだと映るのである（佐藤 2009）。以上のことから、えこひいきはドナーが故意に行っているというよりは、「意図せざるもの」である可能性が高い。

開発研究で著名なロバート・チェンバースは支援先が偏る6つの原

因を提示している（チェンバース 1995）。1 点目は、場所に対するバイアス（偏向）である。支援対象地として好まれるのは、都市周辺や舗装道路の周辺である。それは、ドナーは車による移動が多く、道が舗装されていることでより快適に移動できるからである。また、ドナーが宿泊所などを選びやすいというのも理由の 1 つである。

このバイアスにより、ドナーの注意が向けられるのは、本当に貧しい人ではなく、貧しい人々の中でも相対的にそれほど貧しくない人々である。

2 点目は、プロジェクトへのバイアスである。研究をしようとする人は、既に作られているネットワークを手がかりとしようとする。そして、それらの人々に紹介されるのは既にプロジェクトが実施された地域である。そのような場所は多くの人々が訪れるため、専門のスタッフが配置されるなどしている。その結果、訪問した全員が決まったコースで、決まったガイドを受けることとなる。それに感嘆した研究者たちが出した報告書や出版物によって、その場所が有名になり、さらなる関心や訪問者を呼ぶ。このように、常に同じ場所だけ着目されることでバイアスが生じている。

3 点目は、接触する相手に関するバイアスである。この接触する相手とは、農村の人々の中でドナーに接触する機会が多い「エリート」¹⁶とよばれる人々、そして男性、さらに利用者、活発な人の 4 つのパターンである。まず、「エリート」はドナーにとって主たる情報源である。彼らは「村人の」利益や願い、心配事などを最もスムーズに提供してくれる。しかし、本当に支援の必要な貧しい人々はドナーと話すことはほばないため、彼らの願いは届かない。また、ドナーのほとんどが男性で、さらに農村で接触する人々も男性であるというように偏りがある。これにより、貧しい農村女性は世界で最も悲惨な境遇¹⁷にありながら最も目につきにくい。さらに、利用者へのバイア

スもある。ドナーは施設や新しく開発された技術に興味があるとき、そのようなサービスを利用している人々に注意を向ける。例えば、診療所に興味があるとき、本当に注意をしなければならないのは、より症状が重く、貧しく、遠くて診療所に来られないような人々である。しかし、話を聞きやすいために、ドナーは診療所を実際に利用している人に話を聞く。最後に、死にそうな弱って惨めな子どもよりも、ドナーの乗る車のまわりに集まってくる元気いっぱいの子どもの目に目が向けられる。このように、ドナーが接触する人々によって支援をする際に偏りが生じる。

4点目は、乾季のバイアスである。貧しい農村のほとんどは、雨季と乾季がはっきりと分かれた熱帯地方である。そこで暮らす農業に依存している大多数の人々にとって、雨季は食料不足や病気が蔓延するなどの1年のうちで最も困難な時期である。本来ならば、ドナーはこの時期の農村の人々を支援対象とするべきである。しかし、ドナーはスーツや靴が汚れたりするなどの様々な理由から雨季を好まない。また、洪水や地すべりなどのせいで、車で移動することが不可能となる。よってドナーのフィールド調査は、収穫が開始され、食物が十分に ある乾季に集中する。

5点目は、礼儀正しさや臆病さから生まれるバイアスである。どこの国においても貧困は、無関心や恥辱の対象となり得る。そのため、ドナーは貧しい人が住む地域に入り込めなかったり、聞きにくい質問を尋ねられなかったりする。これにより、必要な調査ができずに対象に偏りが生じる。

6点目は、専門分野へのバイアスである。自分が何を知りたいかがはっきりしていて、かつ時間も限られている専門家は、農村を訪れた際、一層狭い視野しか持たなくなる。つまり、自分の専門分野以外のことは何一つしようとせずに、自分の考えにうまく合うものを探し出

すのである。問題があっても、自分の専門分野であるほんの一部分しか見ようとしないうちに、誤った判断をしてしまう。

チェンバースは、これら6つをバイアスと表現しているが、場所のバイアスなどはドナーが意識的に行っていると考えられる。また、佐藤（2009）は、ドナーが意図せざるものもえこひいきであると指摘している。チェンバースが指摘したバイアスの多くは意識的に行われることではないが、意図とは関係なく結果的にえこひいきにつながっていると考えられる。

第4節 既存研究レビューからみる本研究の意義

本章では、カンボジアの孤児の発生原因と孤児院で生活していない孤児の現状、そしてえこひいきの誘因について述べた。カンボジアの孤児は、以前までは内戦という明確な発生理由があったが、内戦終結から20年経った現在では様々な原因が関係していることが分かった。さらに、兄弟がいても離れて暮らさなければならないケースも多く、そのことが孤児にとってさらなるストレスとなり得るなど、孤児たちが厳しい状況で生活していることが明らかとなった。

また、ドナーの都合でなされるえこひいきや、ドナーが意図せざるとも行われてしまうえこひいきがあることも明らかとなった。既存研究において、援助にはえこひいきの側面があることは論じられている。さらにその一因として、ドナーの都合が関係していることも既に明らかになっている。一見すると本研究のテーマは周知の事実に見えるかもしれない。しかし、これまでのカンボジアの孤児研究は、孤児の発生原因や孤児の現状に着目しているものはあったものの、孤児支援について書かれたものはほとんど見受けられなかった。さらに、その孤児支援についても、援助にはえこひいきの側面があるということに結びつけた支援のあり方について議論した研究はなかった。既に明らか

になっているにもかかわらず、カンボジアの孤児支援という特定の事例からみると、未だにえこひいきが行われていることに筆者は疑問を感じている。カンボジアの孤児支援を通して既存研究だけではみえてこない援助のえこひいきについて考察することが本研究の意義だと考える。

次の第3章では、実際にカンボジアの孤児支援を行なっているNGO団体に聞き取り調査を行った結果をもとに、本研究のテーマを考察する。

第3章 カンボジアの孤児支援の事例検証

第1節 仮説の再確認

カンボジアには60万人を超える孤児がいるにもかかわらず、なぜ孤児支援は孤児院に集中してしまうのか。本章では、この問いに対する仮説をドナーへの聞き取り調査をもとに検証していく。調査方法は第1章で述べた通りで、5団体へのNGO団体に聞き取り調査を行った。

ここで、第1章で述べた仮説を確認しておく。1つ目の仮説は、孤児院に支援が集中するのは、ドナーの事情が優先されているからではないか、である。孤児院は多数の孤児が1ヶ所で生活しているため、支援の継続性や効率性を考えたとき、援助する側（ドナー）にとって支援がしやすいと考えられる。このようなドナーの事情が優先されるために援助が孤児院に集中してしまうのではないだろうか。これを検証するため、聞き取り調査では、「孤児支援を目的としているのに孤児院支援のみを行っている」理由について、ドナーの視点に着目した。2つ目の仮説は、大多数の孤児は農村部にいて、地域社会や親戚が面倒をみってくれるのに対して、都市部の孤児は人のつながりが希薄で、行政以外の助けが得にくいいため、都市部は孤児の比率に対して孤児院が多く、そうした都市部の孤児院への支援が集中しているのではない

だろうか、である。これを検証するため、カンボジアの都市部と農村部の「人のつながりの差」に着目して聞き取り調査を実施した。

第2節 なぜ支援は孤児院に集中するのかドナーの都合

まず、第1の仮説から検証していく。第1の仮説は結論から言えば支持されたと考える。その理由は次の2点である。1点目は、筆者がインタビューを行った5団体中3団体が、孤児院の運営はしていなかったことである。つまり、カンボジアで既に誰かが運営していた孤児院、または建設費用はまかなったが運営面に関わっていない孤児院に対して物資や支援を提供するという手法をとっていた。これは、土地を買ったり孤児院施設を建てるなどの手間が省け、一から始めるよりも初めからスムーズに効率よく支援を始めることができると考えられる。建設費用をまかなったケースでも、団体自ら土地を探したり建設業者を依頼したわけではなく費用を出すのみの関わりだった。さらに、インタビューを行ったすべての団体が、最終的な目標として掲げていたのが、孤児が自立することや支援が必要なくなることであった。孤児が自立し、孤児院への支援からドナーが手を引く際にも、運営を全て終了するより、サポートを終了する方が容易である。これらの点から、孤児院支援の際には継続性や効率性を考慮したドナーの事情が優先されているといえる。

2点目は、孤児院訪問ツアー¹⁸の仕組みにある。自らで企画・実施している団体もあれば、旅行会社と共同企画している団体もある。また、日程のほとんどを孤児院訪問に費やすツアーもあれば、他の観光地も同時に見学できるものもあり、内容は様々である。このツアーは5団体すべてで行われており、その団体のサポーターではない一般の人でもツアーにかかる費用を支払えば参加できるという仕組みであった。ただしそのうち1団体は、一般の人が参加するためにはまず団体

のサポーターになり、年間3万円の支援金を払わなければならないという制限があった。このような孤児院ツアーは、孤児や孤児院支援の現状を多くの人に知ってもらえる機会である一方で、寄付金を集めやすくするなどのドナーの事情が関係していることは否定できない。

これらのことから、ドナーの都合により孤児院に支援が集中してしまうのではないかという第1の仮説は支持されたといえる。

第3節 なぜ支援は孤児院に集中するのか—都市部と農村部での比較

次に第2の仮説の検証である。インタビューをしていく中で、カンボジアには2012年時点で265の孤児院があることが分かった。その内訳は、都市部に25、農村部に240である。筆者の仮説で考えると、都市部では孤児たちが行政に頼るために孤児院の数が多く、逆に農村部は孤児になったとしても近隣の人々が面倒をみてくれるため、数は少なくても良いはずである。しかし、結果は仮説とは正反対に、農村部の孤児院が圧倒的に多かった。その理由として、農村部ではコミュニティ内で孤児がいると分かったとき、地域の人々が孤児を世話するのではなく、孤児院に連れて行くケースが多かったことが挙げられる¹⁹。では、農村部では仮説で示したような地域社会や地域のコミュニティのつながりはなくなってしまったのであろうか。ドナーの多くが、孤児院に入れば支援が受けられることをみんな知っていると話すように、もし自分の住んでいる地域で孤児がいたとしても、地域ぐるみで面倒をみるよりも孤児院に入ったほうが衣食住などの生活に欠かせない最低限のものが確保されている上に、教育を受けられたり職業訓練所に行けるなどの支援が受けられることを知っているのである。また、孤児院で面倒をみてもらえれば金銭面での負担もなくなり、孤児がいることを孤児院に連絡した際、場合によってはお金がもらえることも

理由の1つだと考えられる²⁰。

このように、農村部の人とのつながりというものは仮説で示したようなものではなくなっていることがうかがえる。もちろん、ここで挙げた例だけで、一般論として地域のつながりが希薄化しているとは言いがたい。例えば、インタビューを行った団体の1つである礎の石孤児院²¹は、ある孤児院で暮らす男児について「母親が亡くなってから、仕事のない父親が子どもに暴力を振るうようになった。それをみかねた地域の人々が孤児院に連れてきてくれた」と話した。これは本当に「子どものため」の行為だと捉えることもできる。孤児を自分たちで面倒をみるかどうかという視点に着目すると、以前よりもその傾向はなくなっているようだ。ただ、農村部での人のつながりはなくなったわけではなく、現在も形を変えて存在しているということは触れておきたい。しかし、今まで自分たちが面倒をみてきた孤児たちが孤児院に入ることによって、自分たちの負担も軽減され、孤児たちも多くの支援を受けられることを考えると、農村のコミュニティの人々にとって孤児院の存在というのはとても大きいことは確かであり、それによりコミュニティのあり方は変化してきていると考えられる。

ここで1つ着目したいのは、孤児を孤児院に入れるのはドナーではなくカンボジアの人々だということである。筆者は、ドナー側が支援をするに価する孤児たちを探してくるものだと思っていた。しかし、5団体中3団体が「孤児の子どもたちは近隣の人々や村長が連れてくるので、自分たちで探してくることはない」と話していた。さらに、すべての団体が「孤児の受け入れに条件などはない」としていたことから、孤児として連れてこられれば誰もが孤児院で支援を受けられることになる²²。しかし、実はこの体制に問題があるのではないかと考える。

既述したように、孤児院に入れば最低限衣食住の確保はされており、

さらに無償で教育なども受けられることは広く知られている。そのため、孤児院を利用して子どもを育てようとしている親も存在する。例えば、筆者がインタビューを行った団体の1つである APSARAS（アプサラ）²³ は、受け入れた男児について「小さい頃に孤児として連れてこられた。孤児院で教育などを受け数年が経った頃、親が迎えに来た。実は、実の親でありながらそれを隠し、自分の子どもを孤児院に連れてきたのだ」と語った。孤児院で子どもを引き取る際は村長などと文書を交わすそうだが、その子どもが本当に孤児であると証明できるものは何もない。また、親が迎えに来ててもそれが本当に親かどうか証明できるものもない。このような不透明な仕組みにつけこみ、教育を受けさせる目的で、自分の子どもを孤児院に預けるケースもある。孤児院が本当に支援が必要な孤児のためのものではなく、良いように使われてしまうこともあるのが現状である。ただし、筆者は、孤児院スタッフを騙してまで支援を受けさせようとする家庭に一方的な非があるとはいえないと考える。なぜなら、両親ともにいても金銭的に余裕のない家庭にとっては、孤児だけが孤児院で支援を受けられ、さらにそれが必要最低限のこと以上の支援であるとするならば、それは不公平であり、ドナーの意図とは関係なくえこひいきだとみなされても致し方ないと考えるからである。孤児院の存在によって、孤児の間で支援に差が生まれるだけでなく、孤児ではないが生活に困っている子どもとの間にも一種のえこひいきが生じているといえる。

以上のことから、カンボジアの孤児支援が孤児院支援に集中してしまうのには、人とのつながりや都市部や農村部といったような地域の差は関係がないことが明らかとなった。また、農村部では孤児になった子どもの面倒を地域の人々がみるわけではないことも判明し、カンボジアの農村部におけるコミュニティのあり方が変化してきていることは否定できない。さらに、孤児院の存在によって生活に困窮する家

庭の姿勢までも変化していることがうかがえる。よって第2の仮説は棄却されたといえる。

第4章 結論

第1節 結論

カンボジアには60万人を超える孤児がいるにもかかわらず、なぜ孤児支援は孤児院支援に集中してしまうのか。第3章でNGO団体によるカンボジアの孤児支援を事例に行った2つの仮説の検証結果から導き出した結論は、当初の予想とは異なる部分もあった。

まず、孤児支援が孤児院支援に集中してしまうのは、ドナーの都合が優先されているためではないか、という第一の仮説は支持された。ただし、仮説を導いた根拠と仮説の検証結果には違いがみられる。第一の仮説の根拠で示したドナーの都合というのは、支援をする際のアクセスの良さなどであった。しかし、検証の結果明らかとなったドナーの都合は、援助を始める動機や活動の仕組み、さらに寄付金を集めやすくするための企画などであった。これらの都合が優先されているために、「孤児のための支援」ではなく「ドナーのための支援」になってしまい、支援が特定の場所に集中してしまうと考えられる。

次に、都市部と農村部では地域の人つなかりに差があり、つながりの薄い都市部の孤児は孤児院に頼るために、都市部は孤児の比率に対して孤児院が多く、そうした都市部の孤児院への支援が集中してしまうのではないかと、いう第2の仮説は棄却された。第3章でも述べたように、孤児支援が孤児院支援に集中してしまうのは、都市部と農村部といったような地域の差が原因ではないことが明らかとなった。さらに、孤児になった子どもを地域ぐるみで面倒をみていると考えられた農村部でも、孤児を孤児院に入れるようになったり、両親がいても生活に困窮する家庭が子どもに教育などを受けさせる目的で子ども

を孤児院に入れたり、農村部におけるコミュニティのあり方や、一部の家庭の姿勢が孤児院の存在によって変化していることは否めない。そして、この第2の仮説の検証結果から導き出した新たな仮説を提示したい。

なぜ、カンボジアの孤児支援は孤児院支援に集中してしまうのか。それは、支援の必要のなかった子どもたちまで孤児院で支援を受けようとする中で、孤児院以外の孤児に対して、一層目が向けられなくなったためではないか。孤児院の存在が孤児を見えなくする、いわば「目隠しの効果」が考えられる。以前は農村部の孤児たちは地域で面倒をみてもらっていたが、孤児院の存在によりわざわざ孤児院に入って支援を受けるようになった。さらに、孤児院にいる孤児たちはドナーが探してくるわけではない。また、連れてこられた孤児たちも、本当に孤児なのかどうか証明できるものは何もない。これを利用して、教育などが目的でそもそも孤児でない子どもたちも孤児院で支援を受けようとするようになった。ドナーが基準などを設けずに、また自ら探すことはなく孤児院に来た子どもたちを受け入れるというスタンスのため、本来ならば支援を受ける必要のない子どもたちまで支援の対象となった。孤児院のみに支援を行っていても受け手の側が自ら来てくれることに加え、本来ならば支援対象ではない子どもたちまで支援をしなければならなくなったことで、孤児院にいないカンボジアの大多数の孤児に目を向けられる機会はより一層減り、孤児院への支援が集中してしまうと考えられる。この仮説については今後さらなる検証が必要である。

第2節 考察

本研究の問いに対する筆者なりの答えを前節で示したので、最後に、カンボジアの孤児支援を通して援助のえこひいきについて考察すると

いう本研究の目的に立ち返る。孤児院に対する支援は、確かにカンボジアの一部の孤児の生活を支えていることは否定しがたい。また、農村部ではこれまで地域で孤児の面倒をみていたが、その負担が軽減されたとも考えられる。しかしその一方で、「同じカンボジアの孤児」であっても、孤児院に入っているかどうかで受けられる支援の差が拡大してしまうことも事実である。さらに、孤児院での手厚い支援を知っている人々にとっては、孤児だけが充実した支援を受けられる孤児院支援はえこひいきに映るであろう。

また、筆者が「なぜカンボジアの孤児院支援をしているのか」と質問をした際、挙げられた答えの多くが「縁」であった。例えば、カンボジアで既に孤児支援をしている知り合いから援助をしてほしいと頼まれて始めたケースや、ドナーが団体の活動とは関係なくカンボジアを訪れた際に孤児の現状を目の当たりにし、孤児支援を始めたケースである。

前者は団体が自発的に行なったことではないし、また後者も、偶然自分が会った孤児たちを助けたいという気持ちから孤児支援に至ったものである。広辞苑によると、えこひいきというのは「みなに公平でなく、ある人を特にひいきにすること」とあるから、「縁」や「偶然が重なった」というのは一見するとえこひいきには当たらないと思われるかもしれない。しかし、筆者はこの「偶然」や「縁」という回答こそがドナーの都合でえこひいきがなされている最大の原因ではないかと考える。通常、支援をしようと考えたときにはデータを収集し、サンプリングを行うなど事前調査がされるはずである。それにもかかわらず、今回インタビューを行った5団体のうち3団体が、支援している孤児院の周辺に孤児がいるかどうかさえも把握していなかった。孤児支援を始めるならば、本当に支援が必要な地域を調査し、そこに援助をする必要があるのではないだろうか。知り合いがいるからと

いったような理由で、支援のしやすい場所のみで活動を行なっていることは明白である。これらの点から、孤児支援にはえこひいきの側面があるということは否定できない。ただし、それと同時に、資金や人材、時間的に制約のあるドナーは全くえこひいきをせずに支援を行うことも難しいというのも事実だろう。インタビューをする中で、5団体中2団体から、資金面や人手不足により「現在支援をしている孤児院だけで精一杯」という声が聞かれた。また、孤児院のキャパシティ不足により新たな孤児が受け入れられない団体もあったことから、ドナーの制約は厳しいと考えられる。では、ドナーは支援をする際に生じるえこひいきとどのように付きあっていけば良いのだろうか。この点を今後の課題として次節で述べたい。

第3節 展望

これまでも、開発援助を行ってきたドナーの事例をとりあげ分析することで援助にはえこひいきの側面があることは論じられてきた。しかし、本研究でとりあげたカンボジアの孤児支援の事例をみる限り、未だに援助をする際にはえこひいきされていることが分かる。最後に、本研究が新たに示した視点と今後の課題について述べて本論文を終える。

支援対象者や支援対象先が偏ることについて、既存文献では「バイアス」という言葉が用いられ、聞き取り調査では「縁」や「偶然」という言葉が使われた。これらの言葉からドナーが意識せずにえこひいきをしていることがうかがえる。既存研究を通して、ドナーの考えとして、支援をする際にえこひいきしてはならないが、バイアス（偏向）は仕方が無いという傾向があるように見受けられた。そうした中で、筆者は本研究を通じてドナーが意図しているかどうかと関係なく、結果的に生じているえこひいきについて考える必要性を提起した。

また、カンボジアの孤児研究はこれまで、孤児の人数や発生原因を

述べられたものが多く、孤児支援のあり方について触れているものはなかった。本研究を通して、孤児支援の分析の視点に偏りがみられること、そして孤児院に対する支援を充実させることに集中しすぎて、カンボジアの孤児全体を見渡すことが忘れられていくことの危うさを示したと考える。

本研究を通して、さらなる課題と考えるのは、様々な制約があるドナーが支援を行う際にえこひいきが生じてしまうことは防げないため、どのようにえこひいきと付き合っていけば良いのだろうか、という点である。

そこで、援助にはえこひいきの側面があることをドナーが再認識することが重要だと考える。本来孤児院で支援を受ける必要のない子どもたちまで孤児院で支援を受けるようになったことで、孤児院にいない孤児に一層目が向けられなくなってしまうことは既に述べた。しかし、いくらえこひいきが生じるからといって、それをなくそうとカンボジアの孤児を全員孤児院に入れることや、逆に孤児院という場所をなくすことは不可能である。そこで、ドナーが援助のえこひいきについて認識し、孤児支援の目的や対象について再考することが重要だと考える。また、ドナー間のコミュニケーションも課題であると考ええる。

現在カンボジアでは、都市部開発のために都市部にいる孤児たちが農村部に追いやられている、ということがインタビューを通して分かった。そのため、今後ますます農村部に孤児が集中すると考えられる。しかし、筆者がインタビューを行った5団体中2団体が孤児院のキャパシティ不足により、現在は孤児の受け入れを休止していた。もし、このような孤児院に追いやられてしまった孤児が来ても、孤児院で支援を受けることはできない。このような状況が続くと、孤児院で支援が受けられる孤児とそうでない孤児の差がより一層拡大してしまう。そこで、NGO 同士がより緊密に連絡をとり、受け入れ可能な孤

児院を孤児に提案するなどすれば支援を受けられる孤児は増えるし、受け入れを断った孤児のその後は把握できないといったような問題も解消できると考える。

また、コミュニケーションをとる際は、「孤児院支援 NGO」といったように活動内容で括らないことが望ましい。なぜなら、カンボジアの孤児の発生原因は変化しているからである。かつての内戦孤児の場合は紛争が原因であるため食い止めることは難しく、孤児になってから支援することが重要視されていたかもしれないが、現在は HIV/AIDS や貧困、家庭内暴力など孤児になる前にそれぞれの分野で活動する NGO がサポートすることで、カンボジアの孤児の発生自体を減らすための改善策が見つかると思う。

また、インタビューを通して、NGO の資金が不足している現状を知った。孤児や孤児支援の現状を知る中で改めて、NGO の資金不足が援助のしやすい孤児院に支援を集中させる一因だと考えるようになった。限られた資金の中で効果的な支援をするには、やはり NGO 同士の連携が大切だと思う。1つ1つの NGO としての活動に加えて、カンボジアで活動するドナーが協力しあえる大きなネットワークがあれば、限られた資金の中でもお互いに補完しあえるのではないだろうか。NGO 同士がコミュニケーションを取り合い、援助をする際に本当に支援を必要としている人は誰なのか、その人たちに何をすべきかを考えることは必須であると思う。効果的な支援とは「ドナーにとって都合の良い」ものではなく、「受け手が本当に必要としているときに必要なものができる」ことではないだろうか。そのためには今後、ドナー同士が連携し、協力しあうことが求められると思う。

本研究は極めて限られた時間の中で実施したものではあるが、より平等で公平な支援の実現に向けて具体的な方向性を示す一助になるものと考えている。

注釈

- 1 1987年に設立された、日本最大級のネットワーク型国際協力NGOである。NGOが活動しやすい社会をつくるため、日本の国際協力NGOを正会員とし、NGOを支援するNGOとして活動している。
- 2 開発・環境・人権・平和などの分野で国境を超えて活動する日本のNGOの概要と、最新の詳細なデータを全国規模で収録した、国際協力市民団体概要である。
 広辞苑によれば、孤児は「両親を失った幼児」とあるが、本研究の示す「孤児」は、UNICEFの定義する「片親または両親を失った18歳未満の子ども」とする（UNICEF 2008）。
- 3 NGOダイレクトリーにおいて、検索ワード「カンボジア 孤児」で該当した数である。
- 4 ただし、この数はカンボジアの社会福祉省に正式に登録されている孤児院をあらわしているため、その他の省や登録されていない施設を合わせるとこれより多くなると考えられる。
- 5 カンボジアの孤児の総数を63万人、カンボジアの孤児院で生活している孤児数を1.2万人として算出した。ただし、統計に含まれていないものを含めた場合、それぞれの数は増加する可能性があるが、今回はUNICEFの出している公式な数字をもとに算出している。
 訪問した孤児院はCambodia Light children Association、院長はMr.PAT NOUNである（2010年8月28日に訪問）。また、院長の話は現地ガイドの日本語通訳を介している。
- 6 google検索でもNGOダイレクトリーと同様に「カンボジア 孤児」という検索ワードのもと抽出した。しかし、該当件数が約21万8000件と非常に多かった。さらにその中には一般人の旅行記や旅行会社の企画するツアーなども含まれていたため、新たに2点の条件をつけた。1点目は活動が頻繁に行われていること、2点目はカンボジアの孤児支援を目的としながらも、孤児院のみに支援を行なっていること、である。これらを踏まえた上で4団体に絞り、新たな調査対象とした。
- 7 日本ユニセフ協会のユニセフハウス内の展示物や貸出用の学習教材などを参考にした。

- 8 カンボジア共産党の軍隊（池上 2008）。
- 9 字が書ける者、本を読める者はもちろん、中学校を出ている、メガネをかけているというだけの理由でも知識人とみなされた。また、海外の留学生も帰国させて全員処刑した（池上 2008）。
- 10 ここでは 15 歳から 49 歳までをさす。
- 11 <http://amda.or.jp/old/journal/06/cambodia.html>（閲覧日時：2013 年 11 月 29 日）
- 12 日本ユニセフ協会のユニセフハウス内のパネルや貸出用の資料を参考にした。
- 13 ほかに、UNICEF「Making a Significant and Lasting Difference: The National Plan of Action for Orphans, Children Affected by HIV and Other Vulnerable Children in Cambodia, 2008 – 2010」（2008 年）、UNICEF「With the Best Intentions」、『A Study of Attitudes Towards Residential Care in Cambodia 2011』（2011 年）などがある。
- 14 ここでの論理は、正義感、合理性、援助予算消化の効率性などを指す（佐藤 2009）。
- 15 正式名称は「特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会」。南北問題に象徴される現代社会のさまざまな問題、とりわけ南アジアの貧しい人々の生活上の問題解決に向けた活動を、現地と日本国内で行い、すべての人々がもつ豊かな可能性が開花する社会の実現を目指して、活動している（<http://www.shaplaneer.org/about/index.html>）。（閲覧日時：2013 年 12 月 6 日）
- 16 チェンバースのよぶ「エリート」とは、農村に住む比較的豊かで影響力のある人々のことである。いわゆる進歩的な農民や、村のリーダー、村長、商人、宗教的指導者、教師、専門家などが含まれる。
- 17 貧しい人々の階級の中で、さらに貧しい被抑圧階級を成している。また、彼女たちは長時間労働で男性より低賃金である。
- 18 団体が支援している孤児院を訪問するツアーである。
- 19 筆者が、「孤児院にいる孤児たちは、ドナーが探してきたのか、それとも自ら希望してきたのか」と尋ねた際、礎の石孤児院は「子どもたちが自ら希望してくるなんてことはあり得ない」とした。「こういう孤児がいる、と紹介してくれる人（地域の村長など）がいて、その人たちとの文書を交わした上で、受け取ってくる」、「必要のある場合は、その紹介してくれる人にお金を出すこと

もあると現地スタッフから聞いた」と話していた。

20 脚注 19 を参照。

21 カンボジア、フィリピン、ブラジル、ザンビアに直営の孤児院の働きがある団体である (<http://www.cornerstone.or.jp/index.html>)。(閲覧日時：2013 年 12 月 8 日)

22 孤児院のキャパシティ不足により、現在は入居を断らざるをえない団体もあった。

23 カンボジアの女性と子どもを支援する NGO 団体である (http://apsaras.fc2web.com/apsaras_top.html)。(閲覧日時：2013 年 12 月 8 日)

参考文献・資料

池上彰『そうだったのか！現代史』、集英社、2008 年。

稲田十一「カンボジアにおける近代化と社会関係資本の変容」、『社会関係資本研究論集 第 4 号』、

2013 年：133-165。

上田広美・岡田知子『カンボジアを知るための 62 章【第 2 版】』、明石書店、2012 年。

五月女光弘『ざ・ボランティア NGO の社会学』、国際開発ジャーナル社、1995 年。

佐藤寛『開発援助とバングラデシュ』、アジア経済研究所、1998 年。

——『開発援助の社会学』、世界思想社、2009 年。

田中優・樫田秀樹・マエキタミヤコ『世界から貧しさをなくす 30 の方法』、合同出版、2010 年。

中山元『正義論の名著』、ちくま新書、2011 年。

日本ユニセフ協会ユニセフハウス内資料、「子どもの人権と紛争」

フィリップ・ショート『ボル・ポト ある悪夢の歴史』、山形浩生訳、白水社、2008 年。

ユニセフ（国連児童基金）、「世界子供白書 2005」、公益財団法人日本ユニセフ協会、2005 年。

——「世界子供白書 2006」、公益財団法人日本ユニセフ協会、2006 年。

——「世界子供白書 2007」、公益財団法人日本ユニセフ協会、2007 年。

——「世界子供白書 2009」、公益財団法人日本ユニセフ協会、2009 年。

——「世界子供白書 2011」、公益財団法人日本ユニセフ協会、2011 年。

——「世界子供白書 2013」、公益財団法人日本ユニセフ協会、2013 年。

最優秀賞受賞研究

米山周作「カンボジアへー国連児童基金（UNICEF）の活動を通してー」、『学習院高等科紀要』、2008年：101-134。

ロバート・チェンバース『第三世界の農村開発 貧困の解決ー私たちにできること』、明石書店、1995年。

——『開発調査手法の革命と再生ー貧しい人々のリアリティを求め続けて』、明石書店、2011年。

UNICEF「Making a Significant and Lasting Difference: The National Plan of Action for Orphans, Children Affected by HIV and Other Vulnerable Children in Cambodia, 2008 – 2010」、2008年。

——「Orphans, Children Affected by HIV and Other Vulnerable Children in Cambodia: A Situation and Response Assessment, 2007」、2008年。

——「With the Best Intentions」、『A Study of Attitudes Towards Residential Care in Cambodia 2011』、2011年。